

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成27年10月5日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 京都大学大学院・文学研究科

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 周 悦

助 成 の 種 類	<b>平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成</b>	
研 究 集 会 名	第17回ヨーロッパ発達心理学会	
発 表 題 目	The development of individual differences in preferences for emotional music	
開 催 場 所	ポルトガル・ブラガ・ミーニョ大学	
渡 航 期 間	平成27年 9月 6日 ～ 平成 27年 9月12日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 有 (ポスター, 参加認定書, 海外の研究者からのメール)	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000円
	使用した助成金額	350,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空費 160,510円
		参加費 40,000円
		滞在費 137,500円
査証費 30,961円		
以上に助成金を充当させていただきました。		
当財団の助成について	今回の助成をいただき、本当に助かりました。海外の学会は参加費だけでも高く、その上に高額な交通費がかかるため、学生の私にとって高嶺の花でした。しかし助成金をいただけたおかげで、初めて海外で発表することができました。日本以外の研究者と交流したことで、私は自分の研究をより広い視点で見ることができ、たくさん刺激を受けて研究のモチベーションも一段と上がりました。 今回の助成をいただき、本当に助かりました。海外の学会は参加費だけでも高く、その上に高額な交通費がかかるため、学生の私にとって高嶺の花でした。しかし助成金をいただけたおかげで、初めて海外で発表することができました。日本以外の研究者と交流したことで、私は自分の研究をより広い視点で見ることができ、たくさん刺激を受けて研究のモチベーションも一段と上がりました。	

## 成果の概要

京都大学大学院文学研究科 周 悦

今回報告者が参加した第17回ヨーロッパ発達心理学会は、2年に1度開催されるヨーロッパでの最大な発達心理学会である。今年は歴史が古く、「祈りの町」と呼ばれているポルトガルのブラガで開催された。9月8日からの5日間の学会は、毎日朝から晩まで科学プログラムと社会プログラムが組まれており、どの会場も活気に溢れていた。その中に報告者が気づいたのは、参加者の多様性が受け入れられていること、扱われるテーマの多様性が受け入れられていることであつた。報告者が主に触れている実験心理学以外に、臨床心理学、応用心理学の分野の研究、発達に関する様々な社会問題について扱う発表も多かった。

報告者は9月10日の午前9:00-11:00に行われたポスターセッションで発表した。発表の内容は情動的音楽に対する選好の個人差について研究したものであつた。主として、日本人の就学前児を対象に、彼らの様々な情動を表す音楽に対する選好の個人差はどこから由来するかについて調べ、結果として就学前児の気質および、音楽の表す情動を同定する能力が音楽選好の個人差に関係することであつた。同じ時間帯に行われた全てのポスター発表は「social、emotion、personality」というテーマに分類され、周りに似ているテーマを扱っている研究者が大勢来ていた。特に幸運なことに、報告者の隣は、子どもの気質を測定する質問紙(CBQ)の日本語版を作成した草薙恵美子先生が発表された。草薙先生は今もCBQを使用し、子どもの気質に関する様々な研究をなされており、報告者の発表を高く評価してくれた。また、報告者は草薙先生の紹介のもとで、同じように子どもの気質を扱っている星信子先生とも会話を交わし、研究について有意義なコメントをいただいた。「私たちもずっとこのような研究をしたかった」と先生たちから聞き、大いに励まされた。もう一人の日本人の先生も報告者の研究を聞き、非常に興味があることを示し、「ただ、全体的に何が発達していると想定しているかをはっきりしてほしい」というコメントを残してくれた。そのコメントは報告者が論文を書く際に、イントロダクションについて考えるヒントとなり、非常に有意義であつた。

報告者の研究は、欧米の研究者も惹きつけ、たくさんの研究者が報告者のポスターの前に立ち止まり、報告者と議論を交わした。近年言語と音楽の関係や、言語と音楽の能力の発達が心理学で注目されつつあるが、個人差についての検討はあまりなされていない。しかし報告者が行っている、発達過程における個人差の検討は、一般的発達の様相を探るアプローチにもなるし、応用的側面でも価値があるため、実験心理学だけでなく臨床心理学の研究者も報告者の研究を評価してくれたことであると思われる。その中、オランダのある研究者からは報告者の研究が論文として発表されたら、自分の大学で追試実験をさせてほしいという連絡もきた(添付したメールに参照)。

報告者は自身の発表以外に、ほかのポスター発表や講演を積極的に聞き、貴重な情報を手に入れた。またほかの研究者と議論したことも、貴重な勉強の機会となった。一人の研究者は乳児の自発的微笑と社会的微笑の関係について調べ、そこで扱われている乳児の表情のコーディングは報告者の現在行っている乳児実験の参考になった。また、報告者が読んでいる情動の生理的反応の論文を書かれた松村京子先生も会場におられ、報告者が松村先生の研究に対する疑問とコメン

トは先生に高く評価された。その後、報告者はずっと調べている乳児の表情の生理的評価について松村先生と詳しく議論することができた。

休憩の間、報告者はある臨床心理師である研究者とお互いの研究について語り合った。その研究者は犯罪再犯防止や、うつ病治療などのプログラムを携わっている。報告者の実験心理学とは大きく異なった分野であるが、臨床場面において患者に処方した一つ一つの治療法は実験のようであることを報告者は初めて聞いた。仮説した治療法が正しいなら実験成功となる、正しくなかったら実験失敗となり、新しい治療法を処方する。そのような話を聞き、報告者は臨床心理学に対する興味が湧き、今後は臨床心理学に関する知識も取り入れようと思った。

報告者は自身の研究以外に、研究室で行われているほかの研究に関する情報も積極的に収集した。例えば、今回の学会は家庭教育が発達に対する影響をテーマとした発表もたくさんあった。それは研究室の先輩が行っている、母親の教育の仕方と子供情動発表との関係という研究と関連があると思い、報告者はそれらの講演も聞きに行った。また研究室に乳児の歩行発達の観察研究をしている同期がいるため、報告者は観察データの扱い方のシンポジウムを聞きに行った。講演以外、学会では最新の研究技術を紹介するコーナーも設けられた。報告者は視線データを測定する機器や、観察データのコーディングや表情をコーディングするプログラムのコーナーでデモンストレーションを見て、資料を手に入れた。それらの技術は研究室のプロジェクトで利用できると報告者が思った。報告者は学校に戻ったら学会で収集した情報を皆と共有しようと考えた。